

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00199

研究課題名(和文)江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental Research on the Supports of the Paintings in the Edo Period

研究代表者

安永 拓世(YASUNAGA, Takuyo)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・主任研究員

研究者番号：10753642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：呉春筆「白梅図屏風」の基底材は、国の重要文化財指定では「絹本墨画淡彩」として絹とみなされているが、研究代表者が所属する研究所の保存科学研究センターの協力を得て、FT-IR(赤外分光分析)による分析をおこなったところ、絹ではない植物繊維が使用されていると判明した。同基底材の候補としては、葛布と芭蕉布が想定されるが、両者は染織分野でも混同され、同定が難しい。そこで「白梅図屏風」に類似する基底材について、光学的調査に基づく比較分析をおこなった結果、「白梅図屏風」に使用される基底材は芭蕉布の可能性が高いことを解明した。さらに、芭蕉布などの特殊な基底材と呉春の絵画表現との関わりについても見通しを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

呉春筆「白梅図屏風」に使用されている基底材が、芭蕉布である可能性が高いと解明できたことは、同種の特殊な基底材が使用された絵画の時代性や地域性を検討する点でも学術的に意義深い。とりわけ、沖縄で製作されていた芭蕉布が18世紀から19世紀の絵画の基底材として使用されていた事例は、芭蕉布の流通史を考えるうえでも重要である。また、葛布や芭蕉布の基底材の使用が、中国絵画における紵と同じ効果を狙ったとの考察は、江戸時代中期以降に流行するマチエール表現との関わりを解明するうえでも示唆に富む。さらに、本研究で蓄積された事例は、染織分野における繊維の比較同定に活用することが可能で、学際的な研究として貢献度が高い。

研究成果の概要(英文)：White Plum Blossoms (Hakubaizu Byobu), by Goshun, is a painting on a folding screen designated as an Important Cultural Property. The designation file records the base material as silk. However, a Fourier-transform infrared spectroscopy (FT-IR) analysis carried out in collaboration with the Center for Conservation Science at the principal researcher's Institute revealed that the base material is not silk but a plant fiber fabric. This plant fiber could be either kudzu fiber or basho (Japanese banana) fiber. Both fibers are often confused in the textile field, which makes a definite identification difficult. A comparative analysis based on an optical investigation of a base material similar to that of White Plum Blossoms revealed that there is a high probability that the material is basho fiber. The relationship between the use of a special base material such as basho fiber fabric and Goshun's painting style is also examined.

研究分野：美術史

キーワード：呉春 白梅図屏風 与謝蕪村 芭蕉布 葛布 基底材 表具

1. 研究開始当初の背景

呉春(1752~1811)は、はじめ与謝蕪村(1716~83)に師事し、蕪村没後は、江戸時代の絵画を刷新した円山応挙(1733~95)に接近し、応挙の画風を継承して、四条派と呼ばれる現在の日本画の基礎となる画派を築き上げた、江戸時代の中後期の重要な画家の一人である。

その呉春の代表作で、国の重要文化財に指定されている「白梅図屏風」(逸翁美術館蔵)は、粗く光沢のある布を藍色で染めた特殊な基底材を用いた作品である。同図の基底材は、重要文化財の指定によると「絹本墨画淡彩」として絹とみなされているが、明らかに絹とは異なる植物繊維が確認される。この基底材については、葛布との指摘があるものの、その説明は進んでおらず、また、こうした特殊な基底材が選択された理由も明らかではない。

江戸時代の中後期には、中国の書画におけるマチエール表現(絵画の表面における質感表現)などの影響を受けて、特に文人画(南画)の分野で絨や金箋などの特殊な基底材が用いられ始めた。呉春の最初の師である蕪村は、絨の使用に積極的で、蕪村のマチエール表現と基底材との関連性については、申請者も研究を重ねてきた。そうした過程で、呉春が活躍していた18世紀後半から19世紀の前半ごろ、より特殊な基底材が選択される画期があることが判明してきた。

また、近年は、デジタルカメラやマイクロスコプの発達により、中国絵画や江戸時代の絵画の画絹の詳細な拡大画像を撮影し、それをアーカイブ化して比較することで、書画の制作時期や真贋の判定に役立てようという研究も盛んになってきている。

一方、絵画の基底材に限らず、染織資料においても、植物を主成分とする麻布、芭蕉布、葛布などの植物繊維については同定作業が難しく、素材の説明が進んでいない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、呉春筆「白梅図屏風」に用いられている特殊な基底材の説明を通して、絵画の基底材における特殊な植物繊維の使用例と、その時代性や地域性を明らかにするとともに、江戸時代の中期以降に流行するマチエール表現など表現効果との関わりを考察することにある。加えて、本研究における書画の基底材のアーカイブ化が、染織資料における植物繊維素材の説明や、比較研究に資することも期待したい。

3. 研究の方法

呉春筆「白梅図屏風」の基底材に類似した作例を、絵画資料に限らず、書跡、染織資料、表具裂など、分野横断的に博捜する。そうして情報収集した作例について、高精細のデジタルカメラによって組織拡大写真を撮影するとともに、研究代表者が所属する東京文化財研究所の無形文化遺産部や保存科学研究センターの協力を仰ぎつつ、デジタルマイクロスコプ等の高精細の顕微鏡機器を用いた詳細な撮影をおこなう。そのうえで、基底材や染織資料についての比較や同定を試み、繊維組織拡大写真などの基礎的情報を収集して、蓄積したデータのアーカイブ化を図る。さらに、東京文化財研究所保存科学研究センターの早川典子氏、および東京農工大学の高柳正夫氏・八木千尋氏のご協力を得て、赤外分光法と多変量解析を用いて、呉春筆「白梅図屏風」の基底材に類似した染織文化財である葛布と芭蕉布の判別を試みた。

4. 研究成果

本研究の研究成果としては、以下の点が挙げられる。

呉春筆「白梅図屏風」の基底材が、絹ではないという証明を、赤外分光法によって科学的に示した。

「白梅図屏風」に類似する特殊な基底材を用いた作例が、意外にも30点近く存在することを明らかにした。

これらの特殊な基底材は、目視や光学的調査に基づくと、経糸の違いから二種に大別でき、経糸に絹や木綿を用いているものは葛布、経糸に緯糸と同じ繊維を用いて緯糸が管状の繊維を束ねた状態になっているものは芭蕉布である可能性が高いことを提示した。

葛布と芭蕉布のサンプルを赤外分光分析し多変量解析をおこなった分析結果や、繊維断面(クロスセクション)の観察からも、の分析結果と同様の結果が導き出された。

に基づく光学的調査の結果と、の分析結果から、「白梅図屏風」に用いられている基底材は、芭蕉布である可能性が高いことを説明した。

こうした特殊な基底材の使用について、時代としては、18世紀後半から19世紀前半の時期に集中しており、地域としては、葛布は掛川や静岡周辺という地域性が見いだせるが、芭蕉布は沖縄に限らず全国的に展開していたとみられ、芭蕉布の流通史を推察するうえでも貴重な事例

になることを指摘した。

18世紀後半から19世紀にかけて流行する葛布や芭蕉布といった特殊な基底材の使用が、光沢、独特のイレギュラーな質感、地域性のある希少な素材、などの点において、中国書画における紵や金箋に求められた特徴と一致することから、紵や金箋と類似した表現効果を期待されたのではないかと示唆した。

呉春作品の表具裂に、「白梅図屏風」の基底材と同じ芭蕉布らしき裂が用いられている事例を複数確認できたことから、表具裂として使用されていた芭蕉布が、書画本体の基底材として援用されたのではないかと想定した。

葛布や芭蕉布が、後世に高級な建築内装材として使用されたため、こうした特殊な素材は、表具裂から基底材へ、さらに建築内装材として応用されていったのではないかと推察した。

葛布と芭蕉布は、歴史的な資料と現状の資料とで技法や技術が異なることから、区別に混乱が生じているため、本研究の成果は染織史の分野へも応用可能であることを示した。

ところで、本研究で紹介した特殊な基底材を用いた絵画作例において、その基底材が用いられた理由や表現効果については、より個別具体的な検討が必要ではあるが、少なくとも呉春が「白梅図屏風」の基底材に芭蕉布を用いた意図に関しては、若干の見解を提示しておきたい。

呉春が「白梅図」に、蕪村や応挙との交流に関する記念碑的な意味を込めた可能性についてはこれまでの研究代表者の研究においても言及してきたが（安永拓世「呉春筆「白梅図屏風」(逸翁美術館蔵)をめぐって」(『畫下遊樂(二) 奥平俊六先生退職記念論文集』、藝華書院、2018年))、その前提として、呉春における与謝蕪村筆「鳶・鴉図」(北村美術館蔵)の学習があることに注意を促したい。蕪村の「鳶・鴉図」が、松尾芭蕉(1644~94)、向井去来(1651~1704)、蕪村という三者のイメージを表現した、トリプルイメージの絵画であることについては、以前、研究代表者が指摘した経緯があるが(安永拓世「蕪村筆「鳶・鴉図」をめぐって 蕉風復興運動と南蘋画風」(『美術史』155、美術史學會、2003年))、蕪村の弟子として俳諧師としても活躍し、松尾芭蕉の肖像画などを残している呉春であるならば、基底材としての芭蕉布に、松尾芭蕉のイメージを重ね合わせた可能性が考えられる。すなわち、呉春の「白梅図屏風」が、呉春にとって、きわめてモニュメンタルな作品であることを念頭に置くならば、六曲一双の画面の中に描かれている三株の梅に、俳諧師としての芭蕉、蕪村、呉春の姿が、そして画家としての蕪村、応挙、呉春の姿が重層的に投影されているとも解釈できる。いわば、呉春にとっての「白梅図屏風」は、蕪村の「鳶・鴉図」の、きわめて高度なオマージュであり、こうした点においても、芭蕉布という基底材の選択においても、蕪村画学習の成果が最大限に発揮された作例と位置づけられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 安永拓世	4. 巻 434
2. 論文標題 与謝蕪村筆「十宜図」（川端康成記念会蔵）の史的 position	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『美術研究』	6. 最初と最後の頁 35-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安永拓世	4. 巻 0
2. 論文標題 江戸時代に用いられた特殊な支持体	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書 絹織製作技術』	6. 最初と最後の頁 80-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安永拓世	4. 巻 年報第36号別冊
2. 論文標題 「江戸時代の絵画における特殊な基底材の使用に関する基礎的研究 呉春筆「白梅図屏風」（逸翁美術館蔵）を中心に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『鹿島美術研究』	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 早川典子、八木千尋、山府木碧、安永拓世、菊池理予、高柳正夫
2. 発表標題 植物由来染織文化財の種同定における非破壊赤外分光分析利用の可能性 葛・芭蕉を中心に
3. 学会等名 文化財保存修復学会第43回大会発表（紙面開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 早川典子・菊池理予・仙海義之・安永拓世
2. 発表標題 呉春「白梅図」に使用された絵画基底材料と自然布系基底材に関する研究
3. 学会等名 文化財保存修復学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安永拓世
2. 発表標題 江戸時代中期の画壇と五十嵐俊明 上方と新潟の交流と往来
3. 学会等名 新潟市歴史博物館「生誕320年記念特別展五十嵐俊明 越後絵画のあけぼの」特別講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安永拓世
2. 発表標題 呉春作品に見るテキストとイメージの往還 蕪村・漢詩人・白梅図屏風
3. 学会等名 逸翁美術館「2019展示 池田市制施行80周年記念 画家「呉春」 池田で復活（リボーン）！」関連イベント「呉春の魅力に迫る、フレッシュ対決講座 呉春作品をめぐる絵画vs文学 イメージとテキストのシナジー」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安永拓世
2. 発表標題 京と浪花を行きつ戻りつ 絵と絵師のはざままで
3. 学会等名 中之島香雪美術館 企画展「上方界限、絵師濟々」記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------